

日常の中で最近感じること

林 政喜 (2016年11月執筆)

私生まれも育ちも南信州は伊那市（現在人口6万人の田舎町）。高校卒業後伊那を離れ、地方大学を経て東京のメーカーに勤務、定年退職後帰郷。この9月末に喜寿を迎えました。

現在は年金生活の傍ら、地元の町内会・氏神様・菩提寺・同窓会等の使い走り（ボランティア）で、国益や成長とは無縁の日常です。

先日当通信への寄稿を依頼されました。もとより私には掲載に足る知識も経験も見識も無く困り果てましたが、最近の日常の中で感じていることを紹介させていただきます。

■九条の会と参議院議員選挙

昨年9月の強行採決で成立した戦争法の立案過程から審議・決定過程迄を目の当たりにして、安倍政権の憲法を無視し民主主義を破壊する暴挙に、強い恐怖と怒りを覚えた。

これ迄、政治的な署名活動や選挙応援に自分から積極的に係ることは無かったが、「安倍の暴走を止めなければ」の一念から「戦争法を廃止し、憲法9条を守る」統一署名活動に参加し、7月の参議院議員選挙では反自民の野党の応援活動を行った。具体的には署名活動では町内会・旧学友・親戚等100名程の知人に直接面談して協力頂いた。選挙応援は署名賛同者を中心に電話にて長野県区野党統一候補への投票と応援を依頼した。

以上の初歩的な体験から実感したことは、相手の立場を尊重し、丁寧に当方の意図を説明すれば、期待以上の理解・賛同が得られる（案ずるより産むが易し）ということ、及びお互いの顔が見える狭い地域での活動は日頃のつき合い・信頼関係が肝腎、という至極当たり前の結論に帰着した。

7月の選挙結果は参議院でも改憲勢力が3分の2以上に達し更に状況は悪化した。今後も憲法を守るべく、自分なりの方法で微力を尽す。

■氏神様（地元の鎮守の森）と神社本庁

地元の鎮守の森では、神官と町内から選出された神社総代が住民と協働で、従来から継続している大小合わせ年間数十回の祭事・行事の実施及び社有財産・境内環境の維持管理を行っている。「思想・信条を超えて、地域の伝統と文化を継承し、地域住民の安心・安全・繁栄を祈念し、境内を整備して住民の憩いの場所としても役立ちたい」という考え方で運営に当たっている。

昨年末突然、郡の氏子総代会長名で、事前に何の相談も無く「憲法改正」の署名要請の書類が送付された。地元の鎮守の森では氏子総代会に諮って検討、無視することを決定した。その時は「神社本庁そこ迄やるのか」と驚き、改めて「再び地元の鎮守の森の境内から日の丸と君が代で出征兵士を送り出すことはさせまい」との思いを新たにされた。その後、3月頃から「日本会議」に関する単行本が相次いで発刊され、神社本庁・日本会議・安倍政権相互の密接な関係や役割分担が徐々に表面化してきた。その為か神社上部からの我々末端への露骨な動きは緩和されている模様。その意味ではメディアの情報収集開示の効果は大きいものがある。テレビはともかく大手の新聞までが日本会議の動向にほとんど触れないのも、不思議に思う。

■当面の課題

国政レベルでは、国会のTPP審議を巡っても、自衛隊の「駆けつけ警護」の新任務付与の閣議決定にしても、相変わらず客観的な状況の変化や、国民の反対を無視した安倍政権の強引な手法がエスカレートしている。

一方、「来年頭に解散」の情報もあり、南信州の選挙区での各党の動きも活発化してきたが、組織力の強い改憲勢力に比べ護憲陣営の足並みがなかなか揃わないのが気がかりだ。

私は日常の中で、7月参院選の反省を踏まえ、地域での護憲の輪を広げる為に、ねばり強く活動して行きたい。